



韓国語における動詞の自他 : 結合価変化のない構文はなぜ可能なのか

鄭, 聖汝

(Citation)

神戸言語学論叢, 2:37-66

(Issue Date)

2000-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001546>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001546>



韓国語における動詞の自他 - 結合価変化のない構文はなぜ可能なのか -¹

鄭 聖 汝

Summary

In Korean, deverbal morpheme *-i* (with its allomorphs *-hi*, *li*, and *ki*) is used to derive intransitive and transitive verbs, as well as passive and causative forms. Further, with regard to the correspondence between basic and derived forms, there are valence-alternating as well as non-valence-alternating forms. In this paper we focus on non-valence-alternating forms and argue that they cannot be accounted for in terms of syntactic notions of transitivity, rather in a straightforward way in terms of semantic notion.

キーワード：韓国語、結合価変化、統語的自他、意味的他動性、力動性、最大対立

1 はじめに

1.1 問題の範囲と従来の研究

伝統的に、他動化や使役化は統語構造上、結合価の増加をもたらすものと定義され（例えば、Comrie (1976)、Comrie (1981, 1989)）、一方、自動化や受動化は結合価の減少をもたらすものと説明されてきた（例えば、Perlmutter & Postal (1978)）。つまり、自動詞と他動詞および使役と受動は、結合価の増減という統語的基準によって区別可能なものとして捉えられてきた。

ところが、韓国語には自動詞と他動詞、使役と受動といったすべての文法範疇に、接辞 *-i* (*-hi*, *li*, *-ki*) という同一の文法形式が用いられているという困難な問題が存在する²（下記の (1-4) の (b) を参照）。即ち、結合価を増やすとされる他動化や使役化とともに、結合価を減らすとされる自動化や受動化にも同じ接辞が用いられているのである。

従来の韓国語学では、主に使役と受動に関与する接辞 *-i* について、この形式は同じものかどうか、議論の焦点となっていた（例えば、李 (1970)、梁 (1979)、金 (1982)、Kim (1983)、李 (1991)、他）。しかし、これに関する定説はなく、未解決の問題として残っている。そのため、とりあえず結合価を増加させる接辞 *-i* を使役形、結合価を減少させる接辞 *-i* を受動形として取り扱うという方策をとってきた（例えば、崔 (1937, 1994)、徐 (1996)）。一方で、使役と受動に用いられる動詞を「使動詞」と「被動詞」と名づけ、さらにこれらを他動詞と自動詞と言い替えて説明する方法も用いられてきた（例えば、李・任 (1983)、高・南 (1985)）。このような状況からわかるように、韓国語では、接辞 *-i* が担う機能やそれが関与する動詞が、使役なのか受動なのかといった問題だけでなく、使役なのか他動詞なのか (cf. 宋 (1993)、柳 (1998))、さらに受動なのか自動詞なのか、という問題も同時に存在している。

従来の研究で接辞 *-i* の機能が明らかにされなかった理由として、次の3つの点を挙げることができる。まず第1に、接辞 *-i* が担う文法範疇を体系的に把握しようとする努力やそのような認識が足りなかった。第2に、接辞 *-i* は結合価の増減と相関するものであるという統語的基準だけが考慮され、意味的基準の存在が視野に入っていなかった。第3に、基本形動詞と派生形動詞の対立

が「結合価変化のない構文」にも関与しているという言語事実は考察の対象にされなかった。つまり、統語的基準に合致したデータだけを研究対象にするか、もしくは統語的基準に合わせて説明しようとしてきたのである(李・任(1983:198-99)、宋(1995:160-76)、禹(1996)など³⁾)。そのため、統語的基準に合致しない言語事実はなおざりにされ、実際の言語現象に即した説明ができないうという結果を招くことになった。

以下に、接辞-*i*が関与する構文には、上で述べた統語的基準に合致する構文だけでなく、統語的基準に合致しない構文も存在するという言語事実を提示したい。次の(1-4)は、結合価変化をみせる構文である。続いて(5-6)は、結合価変化をみせない構文である。

<結合価変化のある構文>

- (1) a. ipwul-*i* mal-(l)ass-ta. (自動詞)
 布団-NOM 乾く-PAST-IND
 (布団が乾いた。)
- b. emeni-ka ipwul-ul mal-*li*-ess-ta. (他動詞)
 母親-NOM 布団-ACC 乾く-TSUF-PAST-IND
 (母親が布団を乾がした。)
- (2) a. ai-ka chayk-ul ilk-ess-ta. (他動詞)
 子供-NOM 本-ACC 読む-PAST-IND
 (子供が本を読んだ。)
- b. apeci-ka ai-eykey chayk-ul ilk-*hi*-ess-ta. (使役)
 父親-NOM 子供-DAT 本-ACC 読む-CAUS-PAST-IND
 (父親が子供に本を読ませた。)
- (3) a. yengi-ka mwun-ul yel-ess-ta. (他動詞)
 ヨンイ-NOM ドア-ACC 開ける-PAST-IND
 (ヨンイがドアを開けた。)
- b. mwun-*i* yel-*li*-ess-ta. (自動詞)
 ドア-NOM 開ける-ISUF-PAST-IND
 (ドアが開いた。)
- (4) a. yengi-ka chelswu-lul cha-ss-ta. (他動詞)
 ヨンイ-NOM チョルス-ACC 蹴る-PAST-IND
 (ヨンイがチョルスを蹴った。)
- b. chelswu-ka yengi-eykey cha-*i*-ess-ta. (受動)
 チョルス-NOM ヨンイ-DAT 蹴る-PASS-PAST-IND
 (チョルスがヨンイに蹴られた。)

<結合価変化のない構文>

- (5) a. yengi-ka son-ul ssis-ess-ta. (他動詞)
 ヨンイ-NOM 手-ACC 洗う-PAST-IND
 (ヨンイが手を洗った。)
- b. emeni-ka yengi-uy son-ul ssis-*ki*-ess-ta. (他動詞)
 母親-NOM ヨンイ-GEN 手-ACC 洗う-TSUF-PAST-IND
 (母親がヨンイの手を洗った。)

- (6) a. *nakyep-i palam-ey na-n-ta.* (自動詞)
 枯葉-NOM 風-LOC 飛ぶ-PRES-IND
 (枯葉が風に舞う。)
- b. *nakyep-i palam-ey na-Ii-n-ta.* (受動的自発)
 枯葉-NOM 風-CAUSE 飛ぶ-ISUF-PRES-IND
 (枯葉が風に揺れ動く。)

(3-4) の (b) をみても、他動詞と使役、自動詞と受動のすべての範疇に接辞 *-i* が用いられている。その中で、(1-2) の (b) は結合価の増加をみせ、他方の (3-4) の (b) は結合価の減少をみせている。ところが、(5-6) の (b) では、同じ接辞が用いられているにもかかわらず、(1-4) の (b) のような結合価の増減はみられない。つまり、(5 b) では他動詞である基本形動詞がさらに他動化に向けて別の動詞を派生するが、統語構造上結合価の増加は伴わない。一方、(6 b) では自動詞である基本形動詞がさらに自動化に向けて別の動詞を派生するが、これも基本形動詞と派生形動詞が統語上同じ構造をつくるのである。

さらに、次の (7) の受動構文は結合価の減少が期待されるものである。ところが、この場合には、結合価の増加を伴う使役と同じ構造が使われている。

- (7) *emeni-ka ai-eykey cec-ul mwul-Ii-ess-ta.* (使役/受動)
 母親-NOM 子供-DAT おっぱい-ACC 嘔む-CAUS/PASS-PAST-IND
 (使役；母親が子供に（口におっぱいを入れてやって）お乳を飲ませた。)
 (受動；母親が子供におっぱいを嘔まれた。)

以上のように、接辞 *-i* が関与する構文は、結合価を増やすことも減らすことも可能であり、さらに結合価をまったく変えないことさえ許される。従って、このような現象を適切に扱うためには、統語的な観点からの説明では不十分であることがわかる。即ち、韓国語の動詞の全体的なパラダイムの解明は、接辞 *-i* の本質を明らかにすることによって可能であり、そのためには意味的な観点からの検討が必要になってくる。

1.2 本稿の目的と取り扱い問題

前節で述べたような背景のもと、本稿では、接辞 *-i* の意味的機能が重要な役割を果たしている結合価変化のない構文、とくに (5) のようなものを取り上げて、その本質を追究したい。(6) については、紙面の制約上ここでは取り扱わない⁴。しかしながら、本研究が目指すところは、最終的には使役と受動も視野に入れた韓国語の動詞の全体的なパラダイムの解明に至るような説明を与えることにある。ここでは、接辞 *-i* が担う文法範疇の包括的な体系を考慮に入れた上で、さらに実際の言語事実に照らし合わせて、その本質を捉えようとするものである。

次に、本稿で取り扱う問題を具体的に指摘しておく。次の (8-11) の例を参照されたい。(8) と異なって (9-11) は、他動詞である基本形動詞がさらに他動化派生をするにもかかわらず、対応する2つの構文の関係が「結合価変化のない構文」として現れる。この構文における問題は、韓国語の場合、統語的基準による言語の普遍的傾向が必ずしも該当しない、というところにある。即ち、一般的には他動詞である基本形動詞が他動化に向けてさらに派生形を作ると、使役構文を形成すると理解される (Comrie (1981, 1989), Shibatani (1998) を参照)。しかし、(9-11) の (a) と

(b) は、非使役と使役の対立のように結合価の増加をみせないのである。ただし、他動詞派生形には接辞 *-i* (*-hi*, *-li*, *-ki*) の他に、接辞 *-wu* (*-kwu*, *-chwu*) も用いられる⁵。

- (8) a. *i-ey kochwukalwu-ka kki-e-iss-ta.*
 歯-LOC 唐芥子-NOM 挟まる-ASP-IND
 (歯に唐芥子が挟まっている。)
- b. *chelswu-ka changthul-ey ywuli-lul kki-wu-ko iss-ta.*
 チョルス-NOM 窓の枠-LOC ガラス-ACC 挟まる-TSUF-ASP-IND
 (チョルスが窓の枠にガラスを挿し込んでいる。)
- (9) a. *yengi-ka sonkalak-ey panci-lul kki-ko iss-ta.*
 ヨンイ-NOM 指-LOC 指輪-ACC はめる-ASP-IND
 (ヨンイは指に指輪をはめている。)
- b. *chelswu-ka yengi-uy sonkalak-ey panci-lul kki-wu-ko iss-ta.*
 チョルス-NOM ヨンイ-GEN 指-LOC 指輪-ACC はめる-TSUF-ASP-IND
 (チョルスがヨンイの指に指輪をはめている。)

(8 a) の基本形の *kki-ta* (挟まる) は自動詞用法であり、(8 b) の派生形の *kki-wu-ta* (挿し込む) は他動詞として用いられている。両者の構文は、意味的には直接対応しないが、形態的には自他の対応関係が認められる。一方、(9 a) と (9 b) の関係をみると、形態的な対応関係は、(8 a) と (8 b) の場合とまったく同様であることがわかる。ところが、統語的な観点からみると、両者にはともに対格が用いられていて、しかも結合価の増加もみられない。即ち、前者の (8 a, b) だけを観察している限りは、形態的基準と統語構造が一致するものとして捉えられるが、後者の (9 a, b) まで視野に入れると、形態的基準と統語構造との間に不一致が生じてくるのである。ここで注目すべき問題は、次の 2 点である。

- (I) (8 a) と (9 a) は、統語的な基準によると、前者は自動詞であり、後者は対格をもつため他動詞であると判断される。それにもかかわらず、なぜ形態的に同じ動詞を用いることが可能であるのか。つまり、なぜ統語的には区別されるが、形態的には区別されないのか。
- (II) (9 a) と (9 b) では、両方とも対格をもつため統語的には区別されない。その一方で、形態的には、(8 a) と (8 b) と同様に、自他の対応関係を示す動詞がそれぞれ用いられる。それはいかなる要因によるものであるのか。つまり、なぜ統語的には区別されないが、形態的には区別されるのか。

これらを言い換えると、そもそも自他の区別は何を基準にして行われるべきものであるのか、ということである。

さらに上の例と違って、基本形の自動詞が存在しないものもある。次の (10-11) は、他動詞基本の動詞がさらに派生形他動詞と対応し、しかも結合価は変っていない。とくに (11 b) の派生形動詞は、従来は使役として理解されてきたものである (崔 (1937, 1994), Song (1988), 他)。しかし、この文では、一般的に言われる使役のように、結合価の増加はみせない⁶。

- (10) a. chelswu-ka mwun-ul twutuli-ess-ta.
 チョルス-NOM 門-ACC 叩く-PAST-IND
 (チョルスがドアを叩いた。)
- b. chelswu-ka mwun-ul twutul-*ki*-ess-ta.
 チョルス-NOM 門-ACC 叩く-TSUF-PAST-IND
 (チョルスがドアを(激しく)叩いた。)
- (11) a. yengi-ka son-ul ssis-ess-ta.
 ヨンイ-NOM 手-ACC 洗う-PAST-IND
 (ヨンイが手を洗った。)
- b. emeni-ka yengi-uy son-ul ssis-*ki*-ess-ta.
 母親-NOM ヨンイ-GEN 手-ACC 洗う-TSUF-PAST-IND
 (母親がヨンイの手を洗った。)

(10 a) と (10 b) の違いは、動作の様態の相違に過ぎない。即ち、(10 a) より (10 b) の方が、より強い力で激しい行為を含意する。一方、(11 a) と (11 b) は、自分の手を洗うか、それとも他者の手を洗うか、という意味対立をなす。

本稿では、(9-11) のような基本形動詞と派生形動詞の対立は、意味を基準にした他動性、即ち、「意味的他動性」を提案することによって説明できる、ということを主張したい。ここでいう「意味的他動性」とは、行為が自分の領域 (sphere) の中に納まるか、それとも自分の領域の外に向かって及ぶか、という意味対立を基準とするものである。そしてその範囲は、自分か他者かという意味において最大対立をなすものとする。以下の2節から、上記のような動詞のあり方が、「意味的他動性」のスケール上で適切に扱われるものであることを提示する⁷。

1.3 Hopper & Thompson (1980) の他動性

基本形と派生形という形態上の対立をなす2つの動詞の間に統語構造上の変化がみられないならば、両者の区別には意味的な根拠しか残されていないであろうことは容易に想像できる。しかしながら、このような動詞の意味的差異を記述することは、それ自体たいへん困難な場合が多い。われわれは、この動詞の意味的差異を説明する客観的な基準として Hopper & Thompson の他動性の研究成果を導入したい。それによって、上記の (9-11) で観察されるような基本形動詞と派生形動詞の対立について、他動性の度合いを測る意味論上の説明を与えることができる。Hopper & Thompson (1980) は、他動性の度合いとそれに関連する意味論的な素性として、次の10種類を提案している。

	高	低
A. 参加者の数 (participant)	2 以上	1
B. 力動性 (kinesis)	行為性	非行為性
C. 限界性 (aspect)	限界がある	限界がない
D. 瞬間性 (punctuality)	瞬間的	非瞬間的、継続的
E. 意図性 (intend)	意図的	非意図的
F. 肯定 (affirmation)	肯定的	否定的
G. 様式 (mode)	現実	非現実
H. 動作主性 (agentivity)	動作主の潜在的能力が高い	潜在的能力が低い
I. 目的語への影響力	全体的な影響	影響力なし

	(affectedness of object)	
J.	対象物の個別性	個別性が高い
	(individuation of object)	個別性が低い

また、(J) に挙げられた対象物の個別性に関しては、さらに以下の基準が設けられている。

高	低
個別的	非個別的
固有名詞	普通名詞
人間、動物	非人間、非動物
具体名詞	抽象名詞
単数	複数
加算名詞	不加算名詞
指示的	非指示的

本稿では、これらの他動性の素性に言及しながら、意味を基準とした他動性のあり方について議論していく。

2. 力動性の強化と他者指向性

初めに、前節で提示した(8-9)の *kki-ta* (挟まる、はめる) と *kki-wu-ta* (挿し込む、はめる) の対立を再考してみよう。前述のとおり、これらの動詞は、(8 a) と (8 b) の対立においては統語的な基準による自他の対応関係をなしている。ところが、(9 a) と (9 b) の対立においては、形態的にまったく平行しているにもかかわらず、(8 a) と (8 b) のように統語的基準によっては区別できない。それでは、意味的な観点から言えば、両者にはいかなる要因が関与しているのだろうか。次の例をみてみよう。

- (12) a. *yengi-nun cikum sonkalak-ey kum panci-lul kki-ko iss-ta.* (結果相)
 ヨンイ -TOP 今 指 -LOC 金 指輪 -ACC はめる -ASP-IND
 (ヨンイは今指に金の指輪をしている。)
- b. *yengi-nun cikum aki sonkalak-ey kum panci-lul kki-wu-ko iss-ta.* (進行相)
 ヨンイ -TOP 今 赤ん坊 指 -LOC 金 輪 -ACC はめる -TSUF-ASP-IND
 (ヨンイは今赤ん坊の指に金の指輪をはめているところである。)
- c. *yengi-nun cikum sonkalak-ey kum panci-lul kki-wu-ko iss-ta.* (進行相)
 ヨンイ -TOP 今 指 -LOC 金 輪 -ACC はめる -TSUF-ASP-IND
 (ヨンイは今指に金の指輪をはめているところである。)

(12 a) と (12 b) の基本形動詞と派生形動詞は、自分の身体部分に行為の結果を残しているか、それとも他者に向かって行為が及んでいるか、という意味対立を基本にしている。即ち、(12 a) は、自分でなく他者に向かう行為となる (12 b) と、意味と形態の面において対立をなすものとなる。ところが、(12 c) をみると、派生形動詞は着点名詞句が必ずしも他者の身体部分でなくて

もよい。一方、派生形動詞と違って基本形動詞の場合は、次の (13) のように自分の身体部分でなければならない、という制約が存在する。

- (13) * yengi-ka chelswu-uy sonkalak-ey panci-lul kki-ko iss-ta.
 ヨンイ -NOM チョルス -GEN 指 -LOC 指輪 -ACC はめる -ASP-IND
 (ヨンイがチョルスの指に指輪をはめている。)

以上をまとめると、派生形動詞の場合は、行為の及ぶ範囲として、他者だけでなく自分の身体部分も許されるが、基本形動詞は自分の身体部分しか許されない。このことから、上記の (12 a) と (12 b) が表す自分か他者かの意味対立は、(12 c) と (13) における制約の違いも考慮に入れて理解する必要が生じてくる。それでは、派生形動詞と自分の身体部分が共起するのはいかなる状況においてであろうか。また、それは基本形動詞における自分の身体部分が用いられる状況とどう違うのか。まず、この問題を説明しなければならない。

それを考える前にまず、両者の動詞のアスペクト的意味を考察してみよう。まず、上のように *-ko iss-ta* (ーている) というアスペクト形式を用いた場合、(12 a) の基本形は結果相しか表さず、他方の (12 b, c) の派生形においては進行相の意味しか表さないという違いが存在する。この場合、基本形が表す結果相は瞬間的動作が終わった後の結果状態であるというより、むしろ、所有の意味を表す「もっている」のような動詞に近いと考えられる。たとえば、同じ身体着脱動詞の *ip-ta* (着る) であれば、「(今/鏡の前で) 服を着ている」といった場合は、日本語と同様に韓国語も結果状態よりは進行状態の意味が優先して表されるものである。ところが、(12 a) は、「今」のような時間副詞を用いても(「鏡の前で」と共起しても) 進行状態を表すことはない。このことから、基本形動詞 *kki-ta* (はめる) は行為性 (activity) の低い動詞であると判断することができる。

ここで、この判断を正しいものとして、それを基準に次の文の適格性を考察してみよう。

- (14) a. yengi-ka sonkalak-ey panci-lul kki-ko oychwulha-yss-ta.
 ヨンイ -NOM 指 -LOC 指輪 -ACC はめる -and 外出する -PAST-IND
 (ヨンイは指に指輪をはめて外出した。)
- b. ?? yengi-ka sonkalak-ey panci-lul kki-~~wu~~-ko oychwulha-yss-ta.
 ヨンイ -NOM 指 -LOC 輪 -ACC はめる -TSUF-and 外出する -PAST-IND
 (ヨンイは指に指輪を挟んで外出した。)

(14 a, b) を比べてみると、このような文脈では行為性が低い動詞しか受け入れられない、という説明を与えることができる。なぜなら、先ほど行為性が低いとされた基本形動詞が用いられている (14 a) だけが適格文として容認されるからである。この説明が正しいとしよう。そうすると、派生形動詞とともに自分の身体部分の名詞句が用いられる場合は、文脈上行為性が低いものであってはならない、という意味制約が存在する、と帰結される。つまり、(14 b) の不自然さは、このような意味制約の存在によって説明されることになる。

この行為性の高低を基準にした上記の説明は、次の (15) によって、さらにその妥当性が支持される。

- (15) a. ?? chelswu-ka mwulup sai-ey chayk-ul kki-ko kel-e-ka-n-ta.
 チョルス-NOM ひざ 間-LOC 指輪-ACC 挟む-and 歩く-行く PRES-IND
 (チョルスが両ひざの間に本を挟んで歩いていく。)
- b. chelswu-ka mwulup sai-ey chayk-ul kki-~~wu~~-ko kel-e-ka-n-ta.
 チョルス-NOM ひざ 間-LOC 本-ACC 挟む-TSUF-and 歩く-行く PRES-IND
 (チョルスが両ひざの間に本を挟んで歩いていく。)

(15) の文脈は、物をひざの間に挟んで歩くという困難な状況である。このような状況を描写する場合、派生形を使えば、よちよちした歩き方ではあるがその行為を成し遂げたことになる。一方、基本形を用いると、よちよちした歩き方をするという解釈を許容せずサッサと歩いたという状況しか許さない。そのため、(15 a) は状況的に不可能であると受け止められる。

ここで次のことを指摘したい。行為性の低い基本形を使うときには、困難なくサッサと歩ける状況でなければならない。しかし、(15) のような状況では、行為を行うことが困難である。ところが、(15) の文でも、ひざでなく脇に入れ替えると、そのような困難が取り除かれてサッサと歩ける状況が整うため、基本形の方が容認されやすくなる。それにもかかわらず派生形が用いられているのであれば、それはまだ困難な状況が完全に除去されていないと話者が解釈したからであろう。このように考えてみると、上記の (14 b) の場合も文脈上、事態の成立を阻むような困難が存在するという状況さえ与えられれば、適格な文として許容されうることが予測される。実際、(14 b) の文脈を、普通の状況でなく、指と指の間に指輪を挟んで何かをするというような困難を伴う特別な状況を与えると、不自然な行為ではあるが容認可能になる。

このように事態を引き起こす際に困難が伴うという状況下で、基本形動詞でなく派生形が用いられるということは、次のような文においてより明白になる。即ち、次の (16) のように単なる着用の行為の場合と、(17) のようにエネルギーが要る行為の場合を比べてみると、基本形と派生形の使い方に相違が現れるのである。

- (16) a. chwuwumyen i cangkap-ul kki-ela.
 寒い-なら この 手袋-ACC はめる-IMP
 (寒かったら、この手袋をはめなさい。)
- b. * chwuwumyen i cangkap-ul kki-~~wu~~-ela.
 寒い-なら この手袋-ACC はめる-TSUF-IMP
 (寒かったら、この手袋をはめなさい。)
- (17) a. * panci-ka sonkalak-ey cal an tul-e-ka-se, ekcilo kki-e-neh-ess-ta.
 指輪-NOM 指-LOC よく NEG 入る-行く-ので無理にはめる-入れる-PAST-IND
 (指輪が指にうまく入らなかったのも、無理に入れてはめた。)
- b. panci-ka sonkalak-ey cal an tul-e-ka-se, ekcilo kki-~~wu~~-neh-ess-ta.
 指輪-NOM 指-LOC よく NEG 入る-行く-ので無理にはめる-TSUF- 入れる-PAST-IND
 (指輪が指にうまく入らなかったのも、無理に入れてはめた。)

(16) のように単なる着用の行為の場合は、(16 a) の基本形動詞は受け入れられるが、(16 b) の派生形動詞は不適格である。逆に、(17) のようにエネルギーが要る行為においては、今度は (17 a) の基本形動詞の方が不適格である。

以上のように、ある事態を引き起こす際に困難が存在する場合、それをあえて引き起こすためにはそれなりのエネルギーが必要とされる。これは、現実世界の経験的な知識からも容易に想像でき

る。このような状況が言語に反映される場合には、意味的要素としての力動性 (kinesis) の関与が認められる。なお、そのような力動性の強化により、動作主がより高い行為性 (activity) を獲得することも理に反しない。したがって、行為性の低い基本形動詞は、行為性を高めるために形態的手段を用いて派生する、という派生の必然性が存在することになる。

言い方をかえれば、一般的に自分の領域に納まる行為を引き起こすのは容易であるが、自分の領域の外に向かう行為である場合には困難が伴う。後者の場合、動詞は力動性の強化という意味的な方略を用いることによって自分の領域の外に向かう行為を表すようになりやすい。したがって、これらの動詞における力動性強化は、意味的に対立をなす他者に向かう行為を遂行するためになされるという動機づけを与えることができる。つまり、力動性の最大化は自分と他者という最大対立を目指した「他者指向性」の他動詞にするために要求される、と考えられるのである。したがって、自分の領域の中に存在する身体部分であっても、他者に働きかけるのと同じように事態を引き起こすための困難が生じている場合には、基本形動詞より派生形の方が用いられやすい、と理解することで、以上のような問題が解決できる。このような基本形動詞と派生形動詞の対立は、意味的基準による自他、即ち、「意味的自他」の対応関係として提示することができる。

このような理解を踏まえた上で、今度は kam-ta (巻く) と kam-ki-ta (巻く) の対立をみてみよう。これらの動詞は kki-ta と kki-wu-ta の意味関係とは異なったパターンを示す。まず、基本形動詞として kki-ta (挟まる) のような統語的自動詞は存在しない。次に、基本形の kam-ta (巻く) には、kki-ta (はめる) のように行為性が低いため進行相の意味を表すことは不可能である、といったようなこともない。さらに、kki-ta (はめる) のように自分の身体部分以外には働きかけを行うことができない、などの意味制約も存在しない。つまり、kam-ta (巻く) と kam-ki-ta (巻く) の対立は、kki-ta (はめる) と kki-wu-ta (はめる) の対立と同じように、意味的自他の対応関係として捉えることはできないのである。そればかりでなく、結合価の増加がみられないという説明困難な問題を抱えているのである。

ここで具体例を交えながら、基本形動詞におけるアスペクト形式による意味特徴を考察してみよう。

(18) a. hwanca-ka son-ey pwungtay-lul kam-ko iss-ta. (進行相と結果相)

患者 -NOM 手 -LOC 包帯 -ACC 巻く -ASP-IND

(患者が手に包帯を巻いている。)

b. apeci-ka namwu-ey chelsa-lul kam-ko iss-ta. (進行相)

父 -NOM 木 -LOC 針金 -ACC 巻く -ASP-IND

(父が木に針金を巻いている。)

基本形の kam-ta (巻く) には、(18 a) のように、動作の結果が残存するところが自分の身体部分である場合は、結果相と進行相の両方の解釈が可能である。一方、(18 b) のように、自分の身体部分でない場合は、進行相の意味しか許さず、結果相の意味を表すことはできない。つまり、他の所に行為が向かう場合には、進行中の様態的行為を表すだけである。故に、基本形の kam-ta (巻く) は、kki-ta (はめる) のように行為性が低いものでもない。また、自分の身体部分に限られ、他の所に向けて行為を行なうことはできない、というものでもないことがわかる。

次に、基本形と派生形の対立をみてみよう。(19 a) と (19 b) の対立から観察されるように、この動詞にも結合価の増加はみられない。

- (19) a. nwu-ka {namwu / koyangi mok} -ey pascwul-ul kam-a-noh-ass-ta.
 誰か-NOM {木／猫の首} -LOC 綱-ACC 巻く-置く-PAST-IND
 (誰かが {木／猫の首} にロープを巻いておいた。)
- b. nwu-ka {namwu / koyangi mok} -ey pascwul-ul kam-*ki*-e-noh-ass-ta.
 誰か-NOM {木／猫の首} -LOC 綱-ACC 巻く-TSUF-置く-PAST-IND
 (誰かが {木／猫の首} にロープを巻いておいた。)

(19 a) の基本形動詞と (19 b) の派生形動詞の意味対立は、行為が自分の領域の中に納まるか、それとも自分の領域の外に向かうか、といった意味的自他の対応関係に関わるものではない。これらの動詞について微妙な差は、(19 b) の派生形の場合は、誰かが困難でエネルギーが要る行為をわざわざやっておいた、という力動性の要素が関与していることである。事実、(19 a) の基本形が表す意味は、誰かがそのような行為を行ったという動作主の行為に対する関心を表す程度に過ぎない。一方、(19 b) の派生形の場合は、対象物の措置に関心があり、そのため事態を引き起こすことに対する困難さの認識が生まれると考えられる。

従来、この種の動詞の派生形がもつ力動性の存在は、往々にして、使役に関わるものとして理解されていた。この力動性について明らかにすることは、力動性の要素が語用論的な解釈にいかなる影響を与えるのかについて理解する上でたいへん意義深いことであるため、以下で考察する。まず、次の例を観察してみよう。

- (20) a. payphyen-ey cim-ul {sil / sil-*li*}-e ponay-ss-ta.
 船便-LOC 荷物-ACC {載せる／載せる-TSUF} 送る-PAST-IND
 (船便に荷物を {積んで／載せて} 送った。)
- b. kicha-ey haksayng tul-ul {sil / sil-*li*}-e ponay-ss-ta.
 汽車-LOC 学生.PL-ACC {載せる／載せる-TSUF} 送る-PAST-IND
 (汽車に学生たちを乗せて送った。)

(20) においても基本形 *sit-ta* (積む、載せる) と派生形 *sil-li-ta* (載せる) の間に統語上の変化はまったくみられない。この場合、(20 a, b) の派生形動詞にみられる意味は、その事態を引き起こす動作主がエネルギーをもつ存在であると受け止められうるという点である。つまり、派生形動詞の動作主はその事態の総指揮者ないしは監督者のように認識されやすくなる。それはなぜかという点に答える前に、基本形動詞の場合にはそのような意味がまったく許されないのか、という点をまず確かめておきたい。実は、このような解釈は、基本形動詞においても許容されないわけではない。つまり、基本形動詞の動作主も語用論上は自分が必ずしも直接行為をせず指揮者ないし監督者として働いていてもよいのである。それにもかかわらず、なぜ派生形動詞はそのような読みをより強く与えるのか、という点が問題である。それには次のような2つの相関が考えられる。1つは、派生形動詞が表す状況は対象物の措置に焦点があるため、動作主の行為は焦点から外すことができるということである。もう1つは、行為が対象物の措置に向かっているということは、事態を引き起こすことに対する困難が存在することを示しており、そのため力動性の要素が必要となってくるということである。つまり、派生形が表しているのは力動性の強化がなければその事態は進展しないという状況である。しかし、他方の基本形の場合は、動作主自身の行為に焦点があるため、行為を行うことに対する困難は感じられず、事態が容易に進んでいくような状況であると理解されるのである。このような状況は、語用論的には、派生形動詞の動作主の方がその事態を引き起こしうるエネルギーをもつ存在として解釈され、力動性の要素を反映させていると考えることができる。

この議論は、次のような例によってその妥当性が支持される。

- (21) a. thulek-i cim-ul katuk {sit/*sil-*li*} -ko iss-ta.
トラック-NOM 荷物-ACC いっぱい {載せる/* 載せる-TSUF} -ASP-IND
(トラックが荷物をいっぱい積んでいる。)
- b. namwu-ka tungkwul-ul chingching {kam/*kam-*ki*} -ko-iss-ta.
木-NOM 蔓-ACC ぐるぐる {巻く/* 巻く-TSUF} -ASP-IND
(木が蔓をぐるぐる巻いている。)
- c. pato-ey umak-ul {? sil/sil-*li*}-e ponay-ss-ta.
波-LOC 音楽-ACC {載せる/載せる-TSUF} 送る-PAST-IND
(波に寄せて音楽を届けた。)

(21 a, b) は無生主語であるが、この場合、派生形を用いることは不可能である。一方、(21 c) のように意味的拡張がみられる場合は、派生形の方が自然である。このちがいは次のように説明できる。即ち、前者の場合には、主語が対象物を措置するためのエネルギーをもっていない。一方、後者の場合には、対象物の措置に焦点があり、なおかつ普通は容易にその事態を引き起こすことが可能な状況ではないため、基本形より派生形の方が自然であると判断されるのである。

このように意味的自他の対応関係がみられない種類の動詞の対立においても、実は、*kki-ta* (はめる) と *kki-wu-ta* (はめる) に平行するような点が観察される。即ち、基本形は主語の方に焦点があり、しかも、その事態を引き起こすことがより簡単で容易である。一方、派生形の方は他に行為が向かっており、そのため困難さが認識され、より多くのエネルギーが要る行為となる。したがって、基本形と派生形の選択は、事態を引き起こすための困難さが存在する状況として認識されるか否か、という語用論上の要因によって左右されることになる。たとえば「ヘビがとぐろを巻く」のように、自分の領域の中に納まる行為の場合、その行為は容易であると判断され、基本形が選択される、ということが予測できる。そして、この予測は言語事実に即しているのである。

次に挙げる動詞では、対象が自分か他者かという最大対立こそが重要になる。即ち、基本形は自分の領域の中に存在するものが行為の対象であるが、派生形の場合は他者の領域の中に存在するものが行為の対象となる。これらの動詞において注目すべきところは、*kki-wu-ta* (はめる) のように、他者の身体部分が着点名詞句でなく対格名詞句である、という点である。なおかつ、結合価の増加もみられない⁸。

- (22) a. yengi-ka son-ul ssi-ess-ta.
ヨンイ-NOM 手-ACC 洗う-PAST-IND
(ヨンイが手を洗った。)
- b. emeni-ka yengi-uy son-ul ssi-*ki*-ess-ta.
母親-NOM ヨンイ-GEN 手-ACC 洗う-TSUF-PAST-IND
(母親がヨンイの手を洗った。)
- (23) a. aki-ka os-ul pes-ess-ta.
赤ん坊-NOM 服-ACC 脱ぐ-PAST-IND
(赤ん坊が服を脱いだ。)
- b. yengi-ka aki-uy os-ul pes-*ki*-ess-ta.
ヨンイ-NOM 赤ん坊-GEN 服-ACC 脱ぐ-TSUF-PAST-IND
(ヨンイが赤ん坊の服を脱がせた。)

これらの動詞は、なぜ項の数を増やさない派生を推進するのか。その究極的な要因は何か。この問題に対して、われわれは、これらの動詞が派生を推し進める理由は力動性を獲得するためであり、それは他者に向かう行為を成し遂げるためであると考ええる。つまり、力動性の強化が志向する最大化を満足させるということは「他者指向性」の動詞にすることであり、それが派生を推し進めていく原動力であると結論づけるのである。

ここで、自分か他者かという意味的自他の対応関係をもたないkam-ta (巻く) とkam-ki-ta (巻く) のような動詞の存在を適切に説明するために、力動性と他者指向性の相関関係について次のように考えてみたい。即ち、自分の領域の中に納まる行為は、行為性が低い動詞でもその事態を成し遂げることができる。他方、自分の領域の外に向かう行為の場合は、より多くのエネルギーが要求される。その中でも最も困難な状況は、他者指向性の場合である。したがって、kam-ta (巻く) を使って表す事態であっても、事態を引き起こす際に困難を伴うときには、kam-ki-ta を派生してエネルギーを付与するのである。このことは、いわば、他者に向かう行為並みに事態を引き起こすことに対して困難が存在する、という意味を含むことになる。この考え方については、さらに次節で議論する。

3. 意味的他動性のスケールと動詞の派生のあり方

前節の議論の中で、われわれは、韓国語における動詞の自他の対応は、統語的基準ではなくて、意味的基準によって包括的に捉えることができるものであることを示唆した。意味を基準とする自他においては、自分の領域の中に行為が納まるか、それとも自分の領域の外に向かって行為が及ぶか、という意味対立が重要である。即ち、対格の存在の有無による統語的な基準に関係なく、さらに結合価の増加がなくても自他の対応関係をもつことができるのである。

Kemmer (1993) によると、中相範疇を形態によって示す言語では、「洗う」などの身体行為動詞 (verbs of body-care) や「すわる」のような姿勢変換動詞 (verbs of change in body posture) のように、典型的に身体部分を用いる行為を表す動詞に、中相の形態がマークされる。この場合の中相、とりわけ再帰的な中相というのは、自分の領域の中に行為が納まる、という意味的に自動詞の範疇に属するものである⁹。韓国語の「意味的自動詞」も、自分の身体部分に対する行為を主として表すという点で (5 節を参照)、両者が担っている意味範疇は同一であることがわかる。しかし、形態の面においては、中相は派生形及び屈折形がその意味範疇を担うことになるが、韓国語の「意味的自動詞」の場合は基本形がそれに該当する、という違いがある。

それでは、このような韓国語の「意味的自動詞」が関わる自分の領域とは、どの範囲まで及ぶものであるのか。さらに、韓国語の意味的自他の対応関係を自分か他者かの最大対立における存在であると見なすと、動詞の派生はそのスケールの中でいかなる姿で存在するのか、という問題が浮上する。以下では、この点を中心に意味的他動性のスケールの中に存在する動詞の派生のあり方を考察してみよう。

次の2つの動詞における基本形と派生形は、自分か他者かという点に関して最大対立をなすと考えられる。ところが、自分の領域の中に存在するものの認識の仕方はまったく異なる。つまり、自分に近いものとしてみるか、他者に近いものとしてみるか、という違いが表れるのである。

- (24) a. emeni-ka {son / mom-ey ttay / os / kamca} -lul ssis-ess-ta.
 母親-NOM {手 / (自分の) 体-LOC 垢 / 服 / じゃがいも} -ACC 洗う -PAST-IND
 (母親が {手 / (自分の) 体についている垢 / 服 / じゃがいも} を洗った。)
- b. emeni-ka yengi-uy son-ul ssis-*ki*-ess-ta.
 母親-NOM ヨンイ-GEN 手-ACC 洗う -TSUF-PAST-IND
 (母親がヨンイの手を洗った。)
- (25) a. yengi-ka os-ul pes-ess-ta.
 ヨンイ-NOM 服-ACC 脱ぐ -PAST-IND
 (ヨンイが服を脱いだ。)
- b. yengi-ka {aki-uy os / caki mom-ey ttay / kamcakkepcil} -ul pes-*ki*-ess-ta.
 ヨンイ-NOM {赤ん坊-GEN 服 / 自分の体-LOC 垢 / じゃがいもの皮} -ACC
 脱ぐ -TSUF-PAST-IND
 (ヨンイが {赤ん坊の服を脱がせた。 / (自分の) 体についている垢をこすりとった。
 / じゃがいもの皮を剥いた。})

(24) では自分の身体部分が行為の対象であるか、それとも他者の身体部分が行為の対象であるか、という点において意味対立が存在する。ところが、自分の体についている垢をはじめ、(体から分離している) 服やじゃがいものような他物でも基本形の *ssis-ta* が使える。即ち、(24 a) ではこのような意味対立は観察されず、これらはすべて自分の領域の中に納まる行為と同じく困難さが存在しないと見なされているのである。一方、(25) では、自分の領域の中に存在する服が行為の対象であるか、それとも他者の領域の中に存在する服が行為の対象であるか、という点で対立を表す。ところが、今度は (25 b) のように、自分の体についている垢をはじめじゃがいものような他物が派生形の *pes-ki-ta* と共起できる。このことから、この動詞においてこれらはすべて他者の領域に向かう行為並みに困難さが存在すると見なされていることがわかる。

(24, 25) に共通してみられる自分の領域の範囲には、自分の身体部分と体についている必要な付着物として服までが入る。そして、他者の領域の範囲もそれに準じて認めることができる。つまり、その範囲の中に属するものにおいては自分と他者という意味対立は明らかである。しかし、垢のような体についている不必要な付着物やその他のものについては、動詞によって、自分寄りのもののように容易であると見なすか、それとも他者寄りのもののように困難であると見なすか、ばらつきがみられる。

ここで注意すべきことは、自分の領域に存在するものあるいは他者の領域に存在するものが指す内容は、所有物という抽象的な概念でなく、物理的な距離によって測ることができるものである、という点である。それは次の例から明らかになる。

- (26) a. emeni-ka {apeci / caki} -uy cangkap-ul ssis-ess-ta.
 母-NOM {父親 / 自分} -GEN 手袋-ACC 洗う -PAST-IND
 (母が {父親 / 自分} の手袋を洗った。)
- b. emeni-ka {apeci / caki} -uy os-ul pes-ess-ta.
 母-NOM {父親 / 自分} -GEN 服-ACC 脱ぐ -PAST-IND
 (母が {父親 / 自分} の服を脱いだ。)

(26 a) の動詞は、分離不可能な身体部分の場合と違って、手袋のように分離可能なものにたいしては、自分のものか他者のものかという意味的基準が形態的対立を示すことに結びつかない。たと

えば、古典ギリシア語の能動と中相の対立では、他者のためにシャツを洗うか、自分のためにシャツを洗うか、という意味対立によって、louo khitona (シャツを洗う; Active) と louomai khitona (自分のためにシャツを洗う; Middle) のように形態的な対立を表す (柴谷 (1997) を参照)。それは、柴谷 (1997) によれば、サンスクリット学の伝統では「他へのことば」と「自分へのことば」として区別される。一方、韓国語の場合は、古典ギリシア語のように、自分の所有物が行為の対象になるか、それとも他者の所有物が行為の対象となるのであるかというような基準は、形態的な対立を左右する決定的な要素としては働かない。これは (26 b) の例をみるとより明かである。(26 b) では、他者の所有物であっても自分の体に付着しているものであれば、自分の領域のものとして捉えられることを表す。もし、(26 b) の服が父親の体に付着している状況であれば、その場合は当然派生形を用いなければならない。即ち、自分の領域か他者の領域かという範囲は、韓国語の場合は物理的な距離によって測ることができ、いわば空間的な要因によって左右されるものであることがわかる。

では、前述の (24-25) の問題に立ち返って考えてみよう。ここで問題となるのは、自分と他者の領域に属しない、いわゆる中間的な領域はどのように認識されるのかということである。つまり、それは動詞によって決められているものであるのかどうか、という問題である。たとえば、(24 a) の ssi-ta (洗う) では、垢のように中間的な領域のものであれば、自分寄りのものとして見なされて基本形動詞が用いられるが、それは常に妥当なのであろうか。次の例は、そのような仮説は必ずしも正しくない、ということを表している。

(27) a. mom-ey ttay-lul kkaykkusi {ssis/ssis-*ki*}-e-nay-ss-ta.

体-LOC 垢-ACC きれいに {洗う/洗う-TSUF} - 出す-PAST-IND
(体に付いている垢をきれいにこすりとった。)

b. kamca-ey mwutun hulk-ul kkaykkusi {ssis/ssis-*ki*}-e-nay-ss-ta.

じゃがいもに付いている土-ACC きれいに {洗う/洗う-TSUF} - 出す-PAST-IND
(じゃがいもについている土をきれいにこすりとった。)

(27) は、不必要な付着物である垢や土などをこすり取るという、ある程度力が必要な行為が求められる状況である。このような状況が与えられると、基本形の他に派生形も許されることが確認される。この場合、基本形と違って派生形に含まれる意味は、単に動作主の洗う行為に関心があるのではなく、付着物をこすり取るという事態を引き起こすためには、ただ単に洗うときよりも余分にエネルギーが要ると認識される点である。したがって、この場合の (27) の派生形の ssi-*ki*-ta (洗う) は、pes-*ki*-ta (取り除く) に入れ替えても、意味的にはほぼ同じである。

基本形と派生形の選択を左右するものは、事態を引き起こすことに困難さが存在するか否か、という状況が重要である。また、そのような困難さが存在する状況ではさらに、次のような段階を理解する必要がある。まずは、自分の領域の中に納まる行為は引き起こすことが容易であるが、自分の領域の外に向かう行為にはエネルギーが要るものである、という一般的な基準である。次に、自分の領域の中に属するものであっても、それを引き起こすために困難さが存在する場合は、力動性の強化を求めて派生形を選択する、ということも可能であるということである。この2つの状況が理解できれば、次のような例がなぜ成り立つのか納得できる。

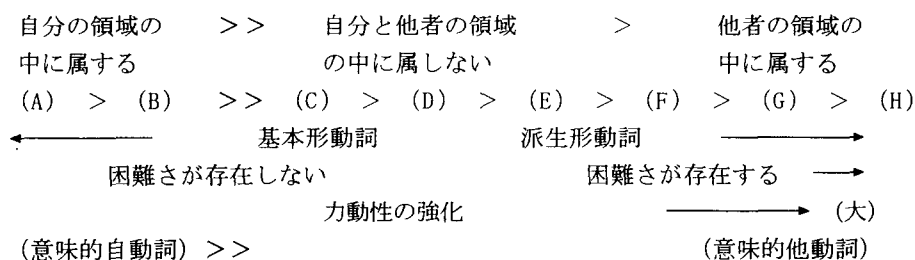
- (28) “...pesen han ccak pes-*ki*-e-noh-ko chima kkun kkullu-ko coktori pes-*ki*-e-
足袋 一足 脱ぐ-TSUF-置く-て スカートの紐 解く-て ソクトリ 脱ぐ-TSUF-
noh-ko nwuwu-nikka ipwul-ul tep-e cwu-te-kwu-man. ...”
置く-て 横たわる-から 蒲団-を 掛ける くれる -MOD-MOD- だけど
((花嫁の私が) 足袋一足を脱いでおいて、スカートの紐を解いて、そしてソクト
リを脱いで横たわると、(新郎の彼が私に) 蒲団を掛けてくれたのじゃ。…)
(高永根・南基心 (1985: 288) から再引用)

(28) の文のコンテキストは結婚初夜という特別な状況である。そのとき、花嫁は衣装を自分から脱いではならず花婿が脱がせてくれるまで待たなければならない、という風習が韓国にはある。ところが、(28) が表す内容は、(おそらく若い花婿はそのような行為がもたらす意味を知らなかったため) 花嫁自身が自らの衣装を脱いだ、という意味を伝える文である。この場合、話者はなぜ自分の服を脱ぐのに基本形を用いず、わざわざ派生形の pes-*ki*-ta (脱がせる、取り外す) を用いたのか、ということに注目されたい。ここでは、派生形を使うことによって、自分の領域の中に納まる行為のように容易なものでなく、他に向かう行為と同様にエネルギーが要る、ということが表現されていることになる。即ち、特別なニュアンスは、花婿がすべき行為なのに自分がその事態を引き起こさなければならない状況であった、ということ強調するという、行為者である語り手の狙いが存在しているということである。

このように、基本形と派生形の使い方に関しては、一般的には自分か他者かという対立が存在するにもかかわらず、さらに自分に対しても派生形が用いられることがある。これは、他に向かう行為並みに困難さが存在する状況を表していると言える。このような例としては、他にも meli-lul pis-ta (髪の毛を梳く) と meli-lul pis-*ki*-ta (髪の毛を梳かす) を挙げることができる。この動詞にも、基本的には自分の頭を梳くか、他者の頭を梳かすか、という意味対立が存在する。しかし、自分の頭でもたやすく行為を行える状態でない場合(たとえば、髪の毛が纏れているなどの障害が生じている) であれば、派生形を用いることも可能になるのである。

ここで、以上の議論をまとめてみる。

(29) <意味的他動性のスケールと動詞の派生のあり方>



- | | | |
|-----------------------|---|---------|
| (A) 自分及び自分の身体部分 | } | 自分の領域の中 |
| (B) 身体に必要な付着物 (服類) | | |
| (C) 身体の不必要な付着物 (垢など) | } | 自分の領域の外 |
| (D) 他物 | | |
| (E) (他所) | | |
| (F) 他者の身体の不必要な付着物 | | |
| (G) 他者の身体に必要な付着物 (服類) | | |
| (H) 他者及び他者の身体部分 | | |

(29) の図が示しているように、自分か他者かという最大対立の中には、自分と他者の領域に属しないものの中間的な領域が存在する。具体的にいえば、自分の領域の中に存在するものは、普通協力的であり事態を引き起こすことが容易である。しかし、他者の領域の中に存在するものは抵抗したり必ずしも協力的ではないため、事態を引き起こすことが困難である場合が多い¹⁰。一方、中間的な領域に属するものが行為の対象になるとときには、基本形と派生形の選択は、自分に対して行う行為のように容易であるか、それとも、他に向かう行為並みの困難さが存在するか、によって異なる。即ち、困難さが存在すると、動詞は力動性の要素を獲得するために派生するのである。したがって、前節で観察した *kam-ta* (巻く) と *kam-ki-ta* (巻く) や *sit-ta* (載せる) と *sil-i-ta* (載せる) は、この中間的な領域に位置づけられる。しかし、意味的には、上で言及した基準によって基本形か派生形かの選択が左右される。実際、この中間的領域に位置づけられる動詞はかなり存在する。その中には、*ton-ul pel-ta* (お金を稼ぐ) と *ton-ul pel-i-ta* (お金を稼ぐ)、*tampay-lul phi-ta* (たばこを吸う) と *tampay-lul phi-wu-ta* (たばこを吸う)、*palam-ul ssoy-ta* (風を当てる) と *palam-ul ssoy-wu-ta* (風を当てる) のように、基本形と派生形の意味的相違がそれほど明確でないものが多い。このような事情から判断すると、むしろ中間的な領域のものの方が歴史的には古いものである可能性が高い。

ちなみに、歴史的な観点からみると、接辞 *-i* と接辞 *-wu* の重複も観察される。たとえば、*ca-ta* (寝る) の派生形は、15世紀頃は *ca-y-ta* (寝かせる) であったが、現代語では *ca-y-wu-ta* (寝かせる) に変化している (許 (1975) を参照)。このような変化を許すのも、結局、派生形の接辞は文法的変換を引き起こす形式ではなく、意味的な基準によって派生する形式であることから裏付けられる。

次の4節と5節では、先ほど挙げた基本形と派生形の意味的相違がそれほど明確でなく、しかも統語的にも区別されない動詞を取り上げる。このような動詞には意味的他動性を仮定する上で、いかなる要素が関与するかを考察したい。

4. 意図的目的の有無

まず、基本形 *oy-ta* (となえる、そらんじる) と派生形 *oy-wu-ta* (暗記する、暗誦する) の対立をみてみよう。両者の意味的相違は極めて微妙であるが、次のような違いからその意味的対立を見出すことができる。

- (30) a. *cwung-i yempwul-ul oy-ko iss-ta.*
お坊さん-NOM 念仏-ACC となえる-ている-IND
(お坊さんが念仏を唱えている。)
- b. ? *cwung-i yempwul-ul oy-wu-ko iss-ta*
お坊さん-NOM 念仏-ACC となえる-TSUF-ている-IND
(お坊さんが念仏を暗記している／暗誦している。)
- (31) a. *ce acwumeni-nun tongneypangney-ey somwun-ul oy-ko tani-n-ta¹¹.*
あのおばさん-TOP 村中-LOC 噂-ACC となえる-て通う-PRES-IND
(あのおばさんは村中のあっちこっちに、噂をとなえまくっている。)
- b. * *ce acwumeni-nun tongneypangney-ey somwun-ul oy-wu-ko tani-n-ta.*
あのおばさん-TOP 村中-LOC 噂-ACC となえる-TSUF-て通う-PRES-IND
(直訳；あのおばあさんは村中に、噂を暗記しながら歩き回っている。)

- (32) a. ? oy-se ssu-si-o.
 となえて 書く -HON-IMP
 (唱えて書きなさい。)
- b. oy-wu-ese ssu-si-o.
 となえる -TSUF- て 書く -HON-IMP
 (暗記して書きなさい。)
- c. kwukwutan-ul oy-wu-e po-si-o.
 九九算 -ACC となえる -TSUF 見る -HON-IMP
 (九九算を暗誦してみなさい。)

(30-32)で観察されるように、oy-ta (となえる) は呪文や念仏、噂などを声に出していう場合の主体の様態的な行為しか認められない。一方、oy-wu-ta (暗記する、暗誦する) は、積極的に新しい情報を頭に入力するために、あるいはすでに入力されているものを出力するために、声に出していうという点で、主体の行為に脳の働きが含まれていることが認められる。つまり、ただ単に声を出してとなえるものであるか、それとも覚えるという意図的な目的をもつものであるか、による意味対立が存在するのである。この場合両者には、「声を出して何かをいう」という共通点は存在するが、それは派生形動詞 oy-wu-ta にとっては必要条件ではない。一方、oy-ta (唱える) は外に表出された主体の様態的な行為でなければならない。即ち、声を出すという物理的な証拠がなければ (様態的な行為がなければ)、主体の行為は実現されなかったことになる。他方、oy-wu-ta (暗記する、暗誦する) は脳の働きを重視するため、主体の行為が外に表出されなくてもよい。つまり、必ず声を出して言わなくても (様態的な行為がなくても)、主体の行為は起こりうる¹²。

それは、(33) のように非現実を表す不可能の mos と限界性を表す ta (全部) が、oy-ta とは共起しないが、oy-wu-ta とは共起可能であることから、明らかである。

- (33) a. ? ku cwung-un yempwul-ul ta mos oy-tela.
 そのお坊さん -TOP 念仏 -ACC 全部 Can. NEG となえる -PAST. MOD
 (そのお坊さんは念仏を全部となえられなかったんだ。)
- b. ku cwung-un yempwul-ul ta mos oy-wu-tela.
 その坊さん -TOP 念仏 -ACC 全部 Can. NEG となえる -TSUF-PAST. MOD
 (そのお坊さんは念仏を全部覚えていなかったため、(最後まで) 暗誦できなかった。)

(33) で用いているモダリティー形式 tela には、話者が目撃した場面をまるで目のまえに展開しているもののように相手に伝達する働きがあるため、派生形は、限界性があるという点で他動性が高い。しかし、ムードは非現実性を支持するゆえ、逆に他動性が低いとも考えられるが、否定対極表現としてみなせば矛盾ではなくなる。

また、oy-ta (となえる) のような基本形動詞は、行為の対象に対して意図的目的をもっていてそれによって主体が積極的な態度をとるとは考えられない。よって、(34 a) のように「最後までやり抜く」という意味をもつ助動詞 -nayta と共起することはできない¹³。これは (34 b) によって確かめることができ、下記の (36-38) で取り上げる基本形動詞 pam-ul say-ta (夜を過ごす) も同様である。

- (34) a. swuhak kongsik-ul 5pwun-maney ta {?? oy / oy-**wu**} -e nay-ess-ta.
 数学公式-ACC5分-で全部{??そらんじる / そらんじる-TSUF}-出す-PAST-IND
 (数学の公式を5分で全部暗記し尽くした。)
- b. hanswumto an cako tases pam-ul kkopak {?? say / say-**wu**} -e nay-ess-ta.
 一睡もせず五つ夜-ACC まるっきり{??明かす / 明ける-TSUF}-出す-PAST-IND
 (一睡もせず5日間夜をまるまる明かし通した。)

次のoy-taの用法は、これまでのように外に表出される行為を表す非限界性 (atelic) の活動動詞 (activity verbs) の用法とは異なり、むしろ状態動詞的である。これは、(35) の基本形動詞oy-taは、常に-ko iss-ta (一ている) と共起して、「知っている」という意味として状態を表す場合からもわかる¹⁴。

- (35) kang-ullo ka-nun kil-ul {oy / ?? oy-**wu**}-ko iss-uni, na-lul ttal-a o-si-o¹⁵.
 川-の方に 行く 道-ACC {となえる / ?? となえる-TSUF} しているから、私について
 きてください。
 (川まで行く道を {知^てっている / ??暗記している} から、私についてきてください。)

次に、say-ta (夜を過ごす) と say-**wu**-ta (夜を明かす) の対立においても、対象に対する意図的な目的が存在するか否かというのが、重要になってくる。

- (36) ecey pam kkopak pam-ul {say / say-**wu**} -ess-ta.
 昨日夜 まるっきり 夜-ACC {明かす / 明ける-TSUF} -PAST-IND
 (昨夜一睡もせず夜を明かしてしまった。)
- (37) wuli onul pam (-ul) kathi {say / say-**wu**} -ca.
 私. PL今晚 一緒に {明かす / 明ける-TSUF}-しよう
 (私たちは今晚一緒に {過ごそう / 明かそう}。)
- (38) tases pam-ul {say / ?? say-**wu**} -ko na-myen, selnal-ita.
 五つ 夜-ACC {明かす / ?? 明ける-TSUF} -と、 正月-IND
 (五日後は、お正月だ。)

(36) をみると、基本形動詞と派生形動詞はともに「夜が明けるまで寝ない」という共通の意味をもっているように思われる。ところが、(37-38) をみると、基本形動詞の場合は「寝ない」という前提が、必ずしも必要な条件ではないということがわかる。即ち、基本形動詞ならば、(37) は夜が明ける時点まで一緒にいさえすればよく、(38) では夜が5回過ぎさえすればよいので、実際は寝ないでいるか否かということに無関係であると判断される。一方、派生形動詞になると、「寝ないで夜を明かす」のでなければ、事態に反することになる。よって、(38) の場合、5日間寝ないで夜を明かすことになってしまうので、派生形動詞を用いると容認度が落ちるのである。

では、なぜ派生形動詞は、基本形動詞とは異なり、明かす対象の「夜」というものに対して「夜が明けるまで寝ない」という行為を、必ず選択しなければならないのであろうか。そして、もし(36) のように基本形と派生形のどちらを用いても「夜が明けるまで寝ない」という同じ事態を表すことができるのならば、両者の意味的な相違はいかなる要因によって区別できるのであろうか。そもそも、なぜ基本形動詞がさらに派生する必然的な理由が存在するのであろうか。これらのことを考察することにあたって、まず次の例を見てみよう。

- (39) a. chelswu-nun ecey macak-ul hataka pam-ul say-ss-ta.
 チョルス-TOP 昨日 麻雀-ACC する途中 夜-ACC 明かす-PAST-IND
 (チョルスが夕べ麻雀をしていたら夜が明けてしまった。→ (夜が明けて (その結果無
 為に) 夜を過ごした。)
- b. chelawu-nun ecey macak-lul hakiwuyhay pam-ul say-wu-ess-ta.
 チョルス-TOP 昨日 麻雀-ACC するために夜-ACC 明ける-TSUF-PAST-IND
 (チョルスは夕べ麻雀をするために (意図的に) 徹夜した。)

(39 a) と (39 b) は、(36) のように「夜が明けるまで寝ない」という共通した意味をもっているとして理解することもできる。ところが、それが、単に寝ないでいるうちに夜が明けたときに、主体がおかれている状況だけを表すのか、あるいは、夜が明けるという事態に対して、意図的な目的をもち、積極的な態度をとるという主体の行為が存在するのか、という微妙なところで、両者の意味的な違いが明白になる。即ち、主体の行為の中に意図による明確な目的が存在するか否かという違いが、基本形と派生形という形態的な対立を生み出す意味的な要因として働いていることがわかる。

ここまでをまとめると、基本形動詞の *pam-ul say-ta* (夜を過ごす) は夜が明ける時点まで主体の人物が寝ないということだけを表している。ただ、夜が過ぎたという状況に主体がおかれているというだけで、それをまるで主体中心の行為のようにして捉えているのである。よって、この場合は「夜が明ける」という事態に対して、主体が意図的な目的をもち、積極的な態度をとるという行為を要求しない。一方、派生形動詞の場合は、夜が明けるまで単に寝ないということだけではなく、それに対する明確な目的や意図が存在する必要がある。いいかえれば、そのような目的や意図が存在するために、何かをしながら積極的に夜を過ごすという意味を見いだすことが可能になる。

ここで挙げている動詞に共通する特徴は、対象物が個別性を持つものでなく、「夜」のような時を表す名詞や日本語のお経のような「念仏」などの抽象名詞である。これらは、Hopper & Thompson の提示する基準によれば、個別性が低いものである。対象物のこのような特徴が、対象に直接働きかけることを妨げるため、その事態 (対象) に対して主体が意図的な目的をもち、積極的な態度をとることにより、他動性強化を図ると考えられる。即ち、対象に対する意図的な目的が存在するか否かという違いは、基本形動詞と派生形動詞の形態的な対立を生み出す要因になるばかりでなく、他動性を強化する意味的要因としても働くことがわかる。

5. 身体部分の対格名詞句制約

次に挙げる動詞には、派生形においては対格名詞句制約が存在しないが、基本形動詞の場合は対格をもつこと自体は可能であるにしても、それは主体と一体になっている身体部分を表す名詞句しか許されないという制約が存在する。

- (40) a. ai-ka {pal/? kwusul}-ul kwulu-ko iss-ta.
 子供-NOM {足/? 玉}-ACC 転がす-ASP-IND
 (子供が地団太を踏んでいる／子供が玉を転がしている。)
- b. ai-ka {pal/kwusul}-ul kwul-It-ko iss-ta.
 子供-NOM {足/玉}-ACC 転がる-TSUF-ASP-IND
 (子供が地面を足で踏み鳴らす。／子供が玉を転がしている。)

- (41) a. ?? chelswu-ka meli-ul kwulu-ko iss-ta.
 チョルス-NOM 頭-ACC 転がす-ASP-IND
 (直訳; チョルスが頭を転がしている。)
- b. chelswu-ka meli-lul kwul-*li*-ko iss-ta.
 チョルス-NOM 頭-ACC 転がる-TSUF-ASP-IND
 (チョルスが頭を働かせている (あれこれ悪知恵を考えている)。)

(40 a) の基本形動詞は、自分の身体を対象としてとることは可能であるが、他物を対象としてとるのは不自然である。一方、(40 b) のように派生形動詞には、そのような制約はない。さらに、(41 a) をみると、基本形動詞は、行為の様態が外に表出ししない行為である場合は、身体名詞句であっても用いることができない。他方の派生形動詞には、そのような制限がない。

即ち、基本形動詞の場合は、対格名詞句が共起するとき、それが主体の領域の外に存在する他物であってはならない。しかも、主体の領域の中に存在するものであっても、主体の行為が外から観察可能な行為でなければならない、という制約が二重に存在するのである。一方、派生形の場合は、対格名詞句に関する制約はなく、さらに、その行為は必ずしも外に表出される必要はない。いいかえれば、(40 a) の基本形動詞は自分と一体化した状態で行為が可能でなければならない、さらに、その行為は外に表出されない限り行為として把握することが不可能なものである。よって、(41 a) の不自然さは、頭と胴体が一体化した状態では述語が表す文字どおりの行為を遂行することは不可能であるからであると説明できる。一方、(41 b) の派生形の場合は、自分と一体のものであれば、それを自分の領域の外に存在する他物と同様に扱う必要が生じる。即ち、主体と身体部分が分離しているものとして認識する、異化するという操作が想定される。つまり、そのような操作が可能なのは、派生形の場合には必ずしも外から観察される行為でなくても許されるからであり、したがって、メタファーによる抽象的な意味への拡張も可能になると思われる。

次に、意図性について考察してみよう。ここで問題になるのは、基本形動詞の対格名詞句は主体と一体化した状態 (非分離の状態) にあるため、意図性をもっているとしても、それは対象に対して働きかけるためのものではない。つまり、意図性があるとしても、その行為は主体の領域の中に納まるものになる。一方、派生形動詞が表す意図性は、自分の領域の外に存在する他物に働きかけるためのものでなければならない。そのため、自分の身体部分の場合は主体と分離した状態にあると認識され、それによって主体が働きかけるべき対象として見なされるようになると考えられる。便宜上、このような基本形動詞の意図性を「自動詞的意図性」¹⁶、派生形の意図性を「他動詞的意図性」と呼ぶことにしよう。次の (42) は、このように定義された意図性によって適切に説明することができる。

- (42) a. ne-nun ilpwule pal-ul {kwulu/kwul-*li*}-ko iss-ci ?
 あなた-TOP わざと 足-ACC {転がす/転がる-TSUF} -ASP-MOD
 (あなたはわざと {地団太を踏んで/地面を足で踏み鳴らして} いるんじゃないの。)
- b. melli-kkaci kunay-lul cha-ol-li-ki-wuyhay, pal-ul himkkes
 遠く-まで ブランコ-ACC 蹴り上げるために 足-ACC 力いっぱい
 {?? kwul/kwul-*li*}-*(l)*ess-ta.
 {?? 転がす/転がる-TSUF} -PAST-IND
 (遠くまでブランコをあげるために力いっぱい足でこいだ。)

(42 a) のように、動詞が表す行為が意図的なものであることを明示しただけでは、基本形動詞と派生形動詞の相違は現れない。ところが、(42 b) では、その行為をすることによって、その結果、他の物にまで変化を与えることが可能であるか否か、という相違がみられる。即ち、その行為が他物に変化を与えるために行われるものであれば、基本形動詞を用いることはできない。いいかえれば、他物に変化を与えるという意図的な目的が存在して、その目的を遂行するために行為を引き起こす場合には、派生形動詞しか受け入れられない。したがって、派生形動詞に与えられているのは「他動詞的意図性」であるが、他方 (42 a) の基本形動詞の場合は「自動詞的意図性」であるとみることができる。

基本形動詞におけるこのような意味的特徴は、対格名詞句をもっている、対象に対する働きかけ性はもたない、という点で、意味的には自動詞と同様であることを物語るものであろう。したがって、自動詞用法が存在しても不思議ではない。たとえば、「酔った男が階段から転がり落ちた。」といった場合、kwulu-nemeci-ta (転がる - 倒れる) のように基本形の自動詞を用いることができる。(43) のような無生物主語の場合は、普通移動動詞と共起しない限り不自然である¹⁷。

- (43) a. ? patak-ey tongcen- i kwulu-n-ta.
 床 -LOC 銭玉 -NOM 転がる -PRES-IND
 (床に銭玉が転がっている。)
- b. patak-ey tongcen- i kwul-le-ka-n-ta.
 床 -LOC 銭玉 -NOM 転がる -行く -PRES-IND
 (床に銭玉が転がっていく。)

ここで、対格をもつ基本形のkwulu-taのような動詞には、次のような意味制約を提示したい。第1に、対格名詞句がある場合、それは主体の領域の外に存在する他物であってはならない。よって、典型的に身体名詞句が対格名詞句の位置に生起しうる。第2に、主体の行為は外からみて判断可能にするため、様態を表す行為でなければならない。このような意味制約がわかれば、次のような様態を表す動詞は、なぜ対格をもつことができるのか、そして、その対格名詞句はなぜ身体部分を典型として用いるのか、さらに、自動詞用法もなぜ同時に存在しうるのか、などの問題に対する説明が可能になる。つまり、このような特徴をもつ動詞は、意味的には自動詞と同じ範疇に属するからということである (cf. Kemmer (1993) の中相範疇。3節を参照)。次の動詞は、(45 b) を除けばすべてオノマトペ副詞に動詞をつくる接辞をつけて動詞化したものである。韓国語においてはこのような語構成は多く観察される¹⁸。

- (44) a. nwun-ul kkamppak- i -n-ta. / nwun- i kkamppak- i -n-ta.
 (目をパチパチする。/ 目がパチパチする。)
- b. kokay-ul kkutek- i -n-ta. / kokay-ka kkutek- i -n-ta.
 (首を傾げる。/ 首が傾げる。)
- c. palkalak-ul kkatak-*keli*-n-ta. / palkalak- i kkatak-*keli*-n-ta.
 (足の指を動かす。/ 足の指が動く。)
- (45) a. chima-lul phellek-*keli*-n-ta. / chima-ka phellek-*keli*-n-ta.
 (スカートをパタパタする。/ スカートがパタパタする)
- b. palam-ey sukhaphu-lul hwynal-*li*-n-ta. (風にスカーフをなびかせる。)
 / palam-ey sukhaphu-ka hwynal-*li*-n-ta. (風にスカーフがなびく。)

(44)の動詞には、対格をもつことができてもそれは身体部分名詞句である。(45)においても対格名詞句のスカートやスカートは、人の身体に密着しているものでなければならない。対格名詞句に関するこのような制約は、身体部分やスカートなどの個別のものの動きを描写することに焦点があるというより、その持ち主である人に焦点を置いてその様態を表すものとして捉えられていると考えなければならない。つまり、対格名詞句をもつ場合は、身体部分の動きがその持ち主の行為として捉えられる。しかし、自動詞用法になると、その人とは独立した個別のものが表立って行っている動きとして捉えることができる。

(44-45)のような自他同形の動詞には、基本形と派生形の対立をもつ動詞と比べると、いくつかの点で意味的な交差がみられる。1つは、意図性に関連している。(44-45)の動詞は、派生形の *kwul-i-ta* (転がす) のように、主語が自分の身体の一部あるいは付着物に意図的に働きかけることを表すことが可能であるようにみえる。一方、基本形の *kwulu-ta* (転がす) のように、対格名詞句が主語と一体化している場合には、それは対象としては見なされず、対象と一体化された主語の行為としてのみ解釈される。しかし、この場合は、基本形の *kwulu-ta* と違って意図性に関与しない。したがって、次の(46)のような文は、意図性の解釈において曖昧な文になる。このように意図性に関して曖昧な文が許されるときは、行為が自分の領域の中に納まるものであるため、他に向かっての働きとはならない。よって、いずれにしても主体の領域の中で起こることであるから意味的な大差はない、ということによるものである。

(46) *kunye-nun chima-lul phellek-keli-mye kel-e ka-ko iss-ess-ta.*

彼女-TOP スカート-ACC パタパタしながら 歩く-行く-ASP-PAST-IND

(彼女はスカートを(意図的に/非意図的に)パタパタさせながら歩いていった。)

もう1つは、瞬間性に関係がある。形態的に自他の区別がない(47 c)のような動詞は、(47 b)の派生形と同様に瞬間的な動作を3回することになる。一方、(47 a)のような基本形動詞の場合は、非瞬間的な動作(時間的な幅を持つ動作)を3回することになる。

(47) a. *nay-ka nathana-myen seyphen pal-ul kwulu-si-o.*

私-NOM 現れたら 3回 足-ACC 転がす-HON-IMP

(私が現れたら、3回地団太を踏みなさい。)

b. *nay-ka nathana-myen seyphen pal-ul kwul-i-si-o.*

私-NOM 現れたら 3回 足-ACC 転がる-TSUF-HON-IMP

(私が現れたら、3回足を蹴りなさい。)

c. *nay-ka nathana-myen seyphen kokay-lul kkutek-i-si-o.*

私-NOM 現れたら 3回 首-ACC 傾げる-HON-IMP

(私が現れたら、3回首を傾げなさい。)

以上の議論から、基本形動詞における身体部分の対格名詞句制約はなぜ存在するのか、ということに関する答えを提示することができる。即ち、それは、対格をもつていても意味的には自動詞と同様に自分の領域の中に納まる行為である、という意味的な基準を満たすためなのである。このような意味的な基準が、韓国語においては対格の有無や結合価の変化という統語的な区別と相関するのでなく、動詞の形態を区別することと相関することが、このような現象を引き起こす根本的な要因であることを提案したい。そう考えると、身体部分の対格名詞句を典型とする身体行為動詞の場合、自他同形の動詞が多く観察されることも納得できる。

6. 意味的他動性と統語的自他

これまでの議論から、韓国語の動詞の自他を考えるためには、統語的自他と次元を異にする意味的自他を設ける必要があることが判明した。ここでは、両者の区別はいかにすればよいのか、という点について考察する。統語的他動性と異なる特徴を表す、意味的他動性のスケールと動詞の派生のあり方については3節で取り上げた。まず、これまで取り上げた基本形動詞と派生形動詞の意味的な相違について、Hopper & Thompson の他動性の程度にかかわる素性とともにその特徴をまとめると、次のようになる。

(48)

	基本形動詞	派生形動詞
統語的基準	対格名詞句有り 自動詞用法も可	対格名詞句有り
対格名詞句制約	制約有り	制約無し
対格名詞句の特徴	身体名詞句及び自分の領域の中のもの	身体名詞句及び他物、他者
主語と対象の分離可能性	分離不可能	分離可能
意図性 (1)	意図的目的無し	意図的目的有り
意図性 (2)	自動詞的意図性	他動詞的意図性
動作の現実性	現実	非現実、現実
限界性	非限界的	限界的
瞬間性	非瞬間	瞬間
力動性／行為性	低い	高い
意味的基準	行為が自分の領域の中に納まる	他の対象物に向かって行為が及ぶ

(48) が示すように動詞の基本形と派生形の対立は、統語的な基準によっては区別されない場合があるが、意味的な基準によっては明らかに区別される。即ち、形態と意味は一対一に対応するが、統語と形態及び統語と意味はそうでない場合がある、ということである。結局のところ、このような形態的対立が表すのは、意味を基準とする自他の対応関係が重視されている、ということを示していると理解されよう。

以下では、これまでの議論と (48) が提示する基準に従い、形態と意味と統語の3者間の関係を整理してみよう。

- (49) a. nal- i say-ss-ta. (統語的・意味的自動詞)
 日 -NOM 明ける -PAST-IND
 (夜が明けた／朝になった。)
- b. pam-ul say-ss-ta. (統語的他動詞／意味的自動詞)
 夜 -ACC 明かす -PAST-IND
 (夜が明けた時点まで起きていた。)
- c. pam-ul say-~~wu~~-ess-ta. (統語的・意味的他動詞)
 夜 -ACC 明ける -TSUF-PAST-IND
 (何かをする目的があつてそのために夜を明かした。)

(49 a) の自動詞用法は (49 c) との対立からみると、1 項から 2 項へ結合価の増加をみせる自他の対応関係にある。一方、(49 b) は (49 a) と形態的には同じであるにもかかわらず、対格をもつことができる。なぜ、自動詞用法をもつ基本形動詞が対格をもつことが可能なのだろうか。4 節での議論に従うと、(49 b) の主語は夜が過ぎる時点まで寝ないという単なる主語の行為にとどまるが、(49 c) の場合は、その事態 (対象) に対して、主体の意図的な目的と積極的な態度をとる行為により、他者として認識することが図られる、という相違が存在する。これは、上記の (48) の意味的基準をもって説明すると、(49 b) は意味的な基準においては自動詞と同じ範疇に属することになる。したがって、(49 b) と (49 c) にみられる形態的対立は、意味を基準とする自他の対応関係であり、その場合は、統語的な基準として要求される結合価の増加は伴わなくてもよい。

意味的な基準による自他の対応関係がより明らかに現れるのは、身体部分の対格名詞句が用いられる場合である。

- (50) a. kwusul- i kwul-(e-ka-n-ta. (統語的・意味的自動詞)
 玉 -NOM 転がる -行く -PRES-IND
 (玉が転がっていく。)
- b. ai-ka kwusul-ul kwul-Ii-n-ta. (統語的・意味的他動詞)
 子供 -NOM 玉 -ACC 転がる -TSUF-PRES-IND
 (子供が玉を転がしている。)
- (51) a. ai-ka pal-ul kwulu-n-ta. (統語的他動詞／意味的自動詞)
 子供 -NOM 足 -ACC 転がす -PRES-IND
 (子供が地団太を踏んでいる。)
- b. ai-ka pal-ul kwul-Ii-n-ta. (統語的・意味的他動詞)
 子供 -NOM 足 -ACC 転がる -TSUF-PRES-IND
 (子供が足に力を入れて地面を蹴り叩いている。)

(50_51) の (a) でともに基本形動詞を用いる理由は、(51 a) は対格をもっていても自分の領域の中に納まる行為であるという、自動詞と同様の意味的な基準を満たしているからであると理解すべきであろう。いいかえれば、(51 a) における身体部分の対格名詞句制約はこのような意味的基準を満たすために誘発されたものとして捉えることができる。一方、派生形動詞の場合は自分の領域の外に向かう行為であり、典型的には (50 b) のように他物に働きかける行為である。そのため、(51 b) のように身体部分であっても他物と同様に対象に働きかけるための意図性をもたな

なければならない。したがって、そのような場合、(51 b) では自分と一体のものを認識的に分離することにより、他として認識し、(51 a) との意味的な自他の対応関係を示していると説明できる。

基本形と派生形のこのような意味的対立は、1. 2 と 2 節で取り上げた *kki-ta* (挟まる、自分の身体部分にはめる) と *kki-wu-ta* (はめる) や *ssis-ta* (自分の身体部分を洗う) と *ssis-ki-ta* (他者の身体部分を洗う) のような動詞においては、より明らかに表出されていることがわかる。

8. 結論

韓国語にはなぜ、基本形動詞と派生形動詞の間に結合価変化のない構文が存在しうるのか。そしてなぜ、統語的基準によっては自動詞と他動詞として区別されるものが、同じ基本形動詞を用いることが可能なのか。これらの問題は、意味を基準にした他動性、つまり意味的自他の対応関係の存在を浮き彫りにすることによって解明される。即ち、基本形の *kki-ta* (挟まる、はめる) は、自分(主語)の領域の中に行為が納まる、という意味的基準において自動詞である。一方、派生形の *kki-wu-ta* (挿し込む、はめる) は、自分の領域の外に向かって行為が及ぶ、という意味的基準において他動詞である。さらに、*ssis-ta* (自分の身体部分を洗う) と *ssis-ki-ta* (他者の身体部分を洗う) の意味対立は、意味的他動性の最大化によって得られたと説明できる。このように定義された「意味的自動詞」は、統語的基準である対格の有無とは関係なく存在する。よって、意味的自他の対応関係を示す基本形動詞と派生形動詞の対立は、結合価変化をみせなくてもよいのである。

意味を基準にする他動詞と統語を基準にする他動性の相違は、次のように示すことができる。統語を基準にする他動性はヤコブセン (1989) が提示する他動性のプロトタイプを参考にしている。

(52) 意味を基準にする他動性		統語を基準にする他動性	
自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
参加者が 1 又は 2	参加者が 2	1 項	2 項
自分の領域の中に行為が納まる	自分の領域の外に向かって行為が及ぶ	対象物は変化を被る	
形態と意味の対応		形態と統語の対応	

韓国語にこのような意味的他動性を見いだすことによって、従来では説明できなかった次のような特徴が説明できるようになる。1 つ目は、人間の行為を表す自動詞であればそのほとんどが対格名詞句を用いることが可能であるのはなぜかということである。たとえば、*wulum-ul wul-ta* ((泣きを泣く) 泣く), *wusum-ul wus-ta* ((笑いを笑う) 笑う), *cam-ul ca-ta* ((寝を寝る) 寝る), *chwum-ul chwu-ta* ((踊りを踊る) 踊る), *kelum-ul ket-ta* ((歩きを歩く) 歩く), *ttwuym-ul ttwuy-ta* ((跳びを跳ぶ) 跳ぶ) などである。これは、自動詞の基本形動詞に対格が現れても、統語的基準とは無関係であるからである。2 つ目に、韓国語には上記のような人間の行為を表す多くの動詞が、対応する語彙の使役交替形を許している²⁰。その理由に対しても、行為のあり方を問題とする意味的他動性を導入することによって正しく説明できる。

最後に、このような意味的他動性の提案は、接辞 *-i* になっている文法範疇、つまり他動性とヴォイスの関係を追求するにも有効である。即ち、使役と受動は行為の方向性 - 自分から他に向かって行為が及ぶか、それとも他から自分に向かって行為が及ぶか - を中心とした、意味的他動性

におけるヴォイスの対立として捉えることが可能になる (cf. 柴谷 (1997), Shibatani (1998 a, b)). なお、他動化と使役化および自動化と受動化の連続性も、意味的他動性のスケールの上で適正に取り扱うことができるようになる (詳細は鄭 (1999) を参照)。さらに、接辞 *-i* のように 1 つの文法形式が、なぜ自動詞と他動詞、使役と受動といったすべての文法範疇に用いられることが可能なのか、その理由に対しても答えることができる。即ち、韓国語の接辞 *-i* の形式は、対象に向かって行為が及ぶ、という意味的機能をもつと定義すればよい。そう考えると、文法的に主語であるか目的語であるかということは関係なくなり、言語現象の実際に即した説明が可能になるのである。

1 本稿は、1999年3月に神戸大学に提出した博士学位請求論文の一部(第3章)をまとめたものである。ご指導にあたってくださった柴谷方良教授と西光義弘教授に厚く御礼を申し上げたい。日本語のネイティブチェックをしてくださった伊藤紀子さんにも心からの感謝を表したい。なお、去る6月25日に夭折してしまわれた故藤井義久氏からは、本稿を草するにあたって、日本語らしい表現や用語の選別に至るまで細かいご指摘を頂いた。この紙面を借りて故人のご冥福を祈りたい。それにもかかわらず不備なところは、すべて筆者の責任である。

2 注5を参照。

3 たとえば、李・任(1983:198-99)と宋(1995:160-76)では、自動詞の受動化においても、文法関係の変換あるいは結合価の減少といった統語的基準に合致するか否かを優先的に適用している。例えば、彼らは、自動詞 $nal-ta$ (飛ぶ、舞う)の受動文として $nak-yep-i\ palam-ey\ nal-li-n-ta$ 。(枯葉が風に揺れ動く)を取り上げている(本文の例(6)を参照)。しかし、この文は自動詞文 $nakyep-i\ palam-ey\ na-n-ta$ 。(枯葉が風に舞う)と比べてみると、語順の変化もなければ結合価の減少も見られない。そのため、自動詞と自動詞派生形を能動と受動の対立として判断するより、他動派生形 $nal-li-ta$ (飛ばす)を自動詞派生形 $nal-li-ta$ (揺れ動く)の能動文として対応させた方がより説得力があるという。このような見方は、動詞の形の変化を基本に態対立を捉えようとした一般的なヴォイスの定義からも外れてしまい、同じ形の派生形同士が能動と受動の対立をなすという不自然な結果を導き出してしまう。

4 このことについては、鄭(1999)を参照されたい。

5 接辞 $-i$ と接辞 $-wu$ は、概略的にいえばそれぞれの音韻環境によって形を変える異形態と考えられているものであるが、実際は、説明できないものも多い。伝統的には、これらの接辞は使役形と呼ばれている。詳細は、崔鉉倍(1937, 1994:411-15, 424-29)を参照されたい。

6 (11)のような例は、一般的には使役として扱われているが、Song(1967)は使役でなく転嫁的(oviative)意味を持つ他動詞文として特徴づけている。このように他動詞として扱っているのは、鷲尾(1997)にも見られる。

7 $hata$ (する)の語彙的使役形 $sikhita$ (させる)の対立においても、接辞 $-i$ や接辞 $-wu$ の有無による基本形動詞と派生形動詞の対立と平行する結合価変化のない構文が存在する。たとえば、 $chatan-hata$ (遮断する)と $chatan-sikhita$ (遮断する)、 $kwusok-hata$ (拘束する)と $kwusok-sikhita$ (拘束する)、 $sokay-hata$ (紹介する)と $sokay-sikhita$ (紹介する)、 $cwumwun-hata$ (注文する)と $cwumwun-sikhita$ (注文する)など、かなりのデータが観察される。詳細は、鄭(1999)を参照。

8 このような特徴をもつ動詞は、従来は使役動詞であるとみなされてきた。われわれは、これらの動詞は基本的には意味的他動詞であると判断し、意味的他動性から使役への展開を仮定する。その点については、別稿にゆずりたい。

9 この指摘は、柴谷方良教授のご指導に負っている。

10 たとえば、子どもの服を脱がす状況などを想像されたい。

11 この場合の $oy-ta$ (唱える)は、動作が大きくなった $oy-chi-ta$ (大きい声で唱える、叫ぶ)と対応する。

12 特にソウル出身の話者は、 $oy-wu-ta$ の $-wu$ を省略して $oy-ta$ と音形的に同一にする現象が強く見られる。しかし、この場合の $oy-ta$ は、念仏などを声に出して読むという意味の $oy-ta$ と違って、 $oy-wu-ta$ からの省略であると認識している。

13 助動詞「 $-nayta$ 」の意味については、Lee(1993:212-20)や門脇(1997)に詳しい。

14 Vendler(1967)のアスペクトによる動詞分類と、金田一(1950)の第4種の状態動詞を参照。両者については、影山(1996)に概略が述べられているので参考になる。

15 この例文は、Shin Ki-chel & Shin Yong-chel(編著) *saywulimal khunsacen*と大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)『朝鮮語大辞典』を参考にした。

16 ここでいう「自動詞的意図性」は、「走る」「踊る」のような非能格自動詞がもつ意図性の性質と同様に考えてよい。

17 自動詞用法において、意図性又は自力で事態を引き起こしうる潜在的能力をもたない主語は、移動動詞と共に起しないと不自然であることが次の例からも窺える。

(1) a. say-ka nal-ass-ta.

鳥-NOM 飛ぶ-PAST-IND

(鳥が飛んだ。)

b. *papsang-i nal-ass-ta.

お膳-NOM 飛ぶ-PAST-IND

(直訳；お膳が飛んだ。)

(2) a. say-ka nal-a-ka-ss-ta.

鳥-NOM 飛ぶ-行く-PAST-IND

(鳥が飛んでいった。)

b. papsang-i nal-a-ka-ss-ta.

お膳-NOM 飛ぶ-行く-PAST-IND

(お膳が飛んでいった。)

18 韓国語学では、これらの動詞を含めた自他同形の動詞は、「能格動詞」(李 (1972), 高 (1986))、「中立動詞」(Yeon (1994))、「中間動詞」(禹 (1996)) などと呼ばれている。

19 言語の一般的な傾向として、状態変化を表す自動詞には語彙的使役形(他動詞)が対応し、行為を表す自動詞および他動詞には生産的使役形が対応する (Haspelmath (1993), Levin & Rappaport Hovav (1995), Shibatani (1998 b) を参照)。ところが、韓国語では行為を表す自動詞のみならず他動詞にも語彙的使役形が対応することができる。即ち、wus-ta (笑う) や ilk-ta (読む) などにも wus-ki-ta (笑わせる) や il-hi-ta (読ませる) のように、接辞-*i* による語彙的な使役交替形が存在するのである。

略語一覧

ACC	Accusative(- <i>(I)ul</i>)	ASP	Aspect
CAUS	Causative	CAUSE	Cause
DAT	Dative(- <i>eykey</i> , - <i>hanthey</i>)	GEN	Genitive(- <i>uy</i>)
GOAL	Goal	HON	Honorific
IMP	Imperative	IND	Indicative
ISUF	Intransitive Suffix(- <i>i</i> , - <i>hi</i> , - <i>li</i> , - <i>ki</i>)	LOC	Locative(- <i>ey</i>)
NEG	Negative marker	MOD	Modal marker
NOM	Nominative(- <i>i</i> , - <i>ka</i>)	PASS	Passive
PAST	Past	PL	Plural marker
PRES	Present	TOP	Topic (- <i>(n)un</i>)
TSUF	Transitive Suffix (- <i>i</i> , - <i>hi</i> , - <i>li</i> , - <i>ki</i> , - <i>wu</i> , - <i>kwu</i> , - <i>chwu</i>)		

参考文献

- 高永根・南基心 (1985), 『標準国語文法論』, 塔出版社.
- 高永根 (1986), *nyungkyeksengkwa kwukeuy thongsakwuco* (「能格性と国語の統語構造」), 『ハングル』第192号, ハングル学会.
- 金韓坤 (1983), *ilunda 'i' sayek kwa phitonguy hwayongloncek coken* (「いわゆる '-i' 使役と被動の語用論的条件」), 『ハングル』180, ハングル学会.
- 柳性基 (1998), 『韓国語 使動詞 研究』, Hongmwunkak.
- 徐正秀 (1996), 『国語文法』, 漢陽大学校出版院.
- 宋昌善 (1993), *kwuke-i-kyey cepmisaury thatonghwa kinung yenkwu* (『国語-i 系接尾辞の他動化の機能に対する研究』), 博士論文, 慶北大学校大学院.
- 梁東揮 (1979), *kwukeuy phi-satong*, (「国語の被・使動」), 『ハングル』166, ハングル学会.
- 禹莫縦 (1996), 『国語 他動構文 研究』, Pakichung出版社.
- 李相億 (1970), *kwukeuy satong-phitongkwumwun yenkwu* (「国語の使動・被動構文の研究」), 『国語研究』26, 国語研究会 (韓国).
- 李相億 (1972), *tongsauythuksengey tayhan ihay*, (「動詞の特性に対する理解」), 『語学研究』8-2. (ソウル大学)
- 李Ik-sep・任洪彬 (1983), 『国語文法論』, 学研社.
- 李Hyang-chen (1991), *phitonguy uymiwa kiwuen*, (『被動の意味と起源』), 博士論文, ソウル大学大学院.
- 崔鉉培 (1937, 1994), *wulimalpon*, (『韓国語の文法』), 正音文化社.
- 許雄 (1975, 1995), *wuli yesmalpon ; 15seyki kwuke hyengthaylon*, (『中世国語の文法_15世紀国語の形態論_』, 泉文化社.
- 影山太郎 (1996), 『動詞意味論 - 言語と認知の接点 -』, 柴谷方良・西光義弘・影山太郎 (編) 『日英語対照シリーズ (5)』, くろしお出版.
- 門脇誠一 (1997), 「朝鮮語の接頭辞について」, 『日本語と朝鮮語 (下巻) _ 研究論文編』, 国立国語研究所.
- 金田一春彦 (1950), 「国語動詞の一分類」, 『言語研究』15, 日本言語学会. (金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録)
- 鄭聖汝 (1999), 『他動性とヴォイス (態) _ 意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究_』, 博士学位請求論文, 神戸大学大学院.
- 柴谷方良 (1997), 「言語の機能と構造と類型」, 『言語研究』112, 日本言語学会.
- ヤコブゼン, ウェスリー. M. (1989), 「他動性とプロトタイプ論」, 久野章・柴谷方良 (編) 『日本語学の新展開』, くろしお出版.
- 鷺尾竜一 (1997), 「第1章: 比較文法論の試み - ヴォイスの問題を中心に -」, 伊藤真他6人 (共) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』, 筑波大学現代言語学研究会.
- Comrie, Bernard. (1976), "The syntax of causative constructions: Cross-language similarities and divergences." M. Shibatani (ed.), *The Grammar of Causative Constructions (Syntax and Semantics 6)*. New York: Academic Press.
- Comrie, Bernard. (1981, 1989), *Language universals and linguistic typology*. 松本克己他 (訳) 『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房.
- Haspelmath, Martin (1993), "More on the Typology of Inchoative/Causative Verb Alternations." *Causatives and Transitivity*, B. Comrie and M. Polinsky (eds.),

- Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, Paul and Sandra Thompson(1980), "Transitivity in grammar and discourse." *Language* 56.
- Kemmer, Suzanne (1993), *The Middle Voice*. TSL 23, Amsterdam: John Benjamins
- Kim, Han-kon(1982), "Cause as the Deep Semantic Source of so-called Causative and Passive with Special Reference to the Metaphorical Interpretation of i Mopheme in Korean." *Language Research* 18-1. (Seoul University)
- Lee, Kee-dong (1993), *A Korean Grammar: on Semantic_Pragmatic Principles*. Seoul: 韓國文化社.
- Levin&Rappaport Hovav(1995), *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Perlmutter, David and Paul Postal(1984), "The 1-Advancement Exclusiveness Law." D. Perlmutter and C. Rosen(eds.), *Study in Relational Grammar 2*, University of Chicago Press.
- Shibatani, Masayoshi(1998 a), "Voice Parameters." *Kobe papers in Linguistics* 1, 神戸大学文学部言語学研究室.
- Shibatani, Masayoshi(1998 b), "Issues in Transitivity and Voice: A Japanese Perspective." 神戸大学文学部未公開論文.
- Song, Seok-choong (1967), *Some Transformation Rules in Korean*. Ph. D., Indiana University.
- Song, Seok-choong(1988), *Explorations in Korean Syntax and Semantics*, Institute of East Asian Studies KRM 14, University of California Berkeley.
- Vendler, Zeno(1967), *Linguistics Philosophy*. Cornell University Press.
- Yeon, Jae-hoon(1994), *Grammatical Relation Changing Constructions in Korean: A Functional-Typological Study*, Ph. D., SOAS. University of London.